

平安京左京一条二坊十二町跡

2004年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

平安京左京一条二坊十二町跡

2004年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

序 文

京都には数多くの有形無形の文化財が今も生きています。それら各々の歴史は長く多岐にわたり、京都の文化の重厚さを物語っています。こうした中、地中に埋もれた文化財（遺跡）は今は失われた京都の姿を浮かび上がらせてくれます。それは、平安京建設以来1200年以上にわたる都市の営みやその周りに広がる姿をも再現してくれます。一つ一つの発掘調査からわかってくる事実もさることながら、その積み重ねによってより広範囲な地域の動向も理解できることにつながります。

財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、こうした成果を現地説明会や写真展、考古資料館での展示、ホームページでの情報発信などを通じて広く公開することで市民の皆様へ京都の歴史像をより実態的に理解していただけるよう取り組んでいます。また、小学校などでの地域学習への成果の活用も、遺物の展示や体験授業を通じて実施しています。今後、さらに埋蔵文化財の発掘調査成果の活用をはかっていきたいと願っています。

研究所では、平成13年度より一つ一つの発掘調査について報告書を発刊し、その成果を公開しています。調査面積が十数平方メートルから、数千平方メートルにおよぶ大規模調査までありますが、こうした報告書の積み重ねによって各地域の歴史がより広く深く理解できることとなります。

このたび寄宿舍建設工事に伴う平安京跡の発掘調査成果を報告いたします。本報告書の内容につきましてお気づきのことがございましたら、ご教示たまわりますようお願い申し上げます。

末尾ではありますが、当調査に際して御協力と御支援をたまわりました多くの関係者各位に厚くお礼と感謝を申し上げます。

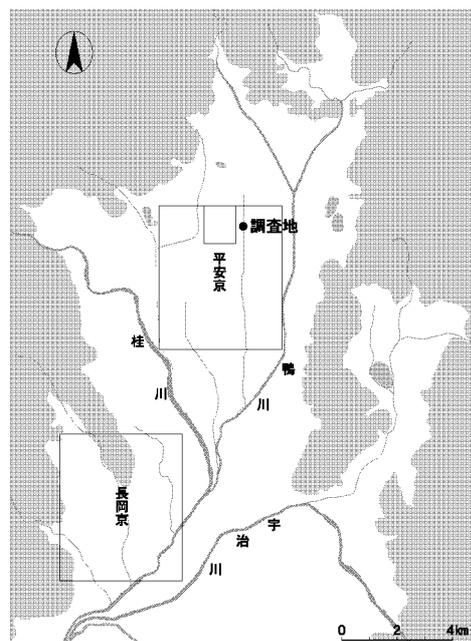
平成16年5月

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

所 長 川 上 貢

例 言

- 1 遺 跡 名 平安京左京一条二坊十二町跡
- 2 調査所在地 京都市上京区東堀川通榎木町上る五丁目205-1他
- 3 委 託 者 株式会社共立メンテナンス 代表取締役 石塚晴久
- 4 調査期間 2004年2月25日～2004年3月24日
- 5 調査面積 136.5m²
- 6 調査担当者 網 伸也
- 7 使用地図 図1は、京都市発行の都市計画基本図（縮尺1：2,500）「聚楽廻」を参考にし、作成した。
- 8 使用測地系 日本測地系（改正前）平面直角座標系（ただし、単位（m）を省略した）
- 9 使用標高 T.P.：東京湾平均海面高度
- 10 使用基準点 京都市が設置した京都市遺跡測量基準点（一級基準点）を使用した。
- 11 使用土色名 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。
- 12 遺構番号 遺構ごとに通し番号を付した。
- 13 遺物番号 図の順に通し番号を付した。
- 14 掲載写真 村井伸也・幸明綾子・調査担当者
- 15 遺物復元 村上 勉・出水みゆき
- 16 基準点測量 宮原健吾
- 17 本書作成 網 伸也
- 18 編集・調整 児玉光世・清藤玲子
- 19 材質鑑定 井戸1出土の石硯の材質鑑定は京都府立山城郷土資料館の橋本清一氏に依頼した。



（調査地点図）

目 次

1 . 調査経過	1
2 . 位置と環境	2
3 . 遺 構	4
(1) 平安時代の遺構	4
(2) 室町時代の遺構	6
4 . 遺 物	8
(1) 平安時代中期の遺物	8
(2) 平安時代後期の遺物	10
(3) 室町時代の遺物	13
5 . ま と め	16

図 版 目 次

図版 1	遺構	平安時代遺構面平面図 (1 : 100)
図版 2	遺構	室町時代遺構面平面図 (1 : 100)
図版 3	遺構	1 平安時代遺構面全景 (東から) 2 井戸 1 (東から) 3 井戸 1 最下段横棧 (南東から)
図版 4	遺構	1 室町時代遺構面全景 (東から) 2 建物 1 柱列 (東から) 3 井戸 2 (西から)
図版 5	遺物	土壙 1 ~ 3 出土土器・飾金具
図版 6	遺物	井戸 1 出土土器
図版 7	遺物	1 井戸 1 出土輸入白磁 2 井戸 1 出土石硯
図版 8	遺物	中世包含層・建物 1 柱穴・井戸 2 出土土器

挿 図 目 次

図 1	調査位置図 (1 : 5,000)	1
図 2	平安京左京一条二坊十二町調査地配置図 (1 : 1,000)	2
図 3	調査前全景 (東から)	3
図 4	調査風景	3
図 5	南壁断面図 (1 : 50)	4
図 6	井戸 1 実測図 (1 : 50)	5
図 7	井戸 2 見通し断面図 (1 : 50)	6
図 8	中世柱穴礎石断面	7
図 9	土壌 1 ~ 3 出土土器実測図 (1 : 4)	9
図 10	土壌 1 出土飾金具実測図 (1 : 1)	10
図 11	井戸 1 出土土器実測図 (1 : 4)	11
図 12	井戸 1 出土石硯実測図 (1 : 4)	11
図 13	井戸 1 出土石硯	11
図 14	井戸 1 出土瓦類拓影・実測図 (1 : 4)	12
図 15	中世包含層・建物 1 柱穴・井戸 2 出土土器実測図 (1 : 4)	13
図 16	中世遺構出土軒瓦拓影・実測図 (1 : 4)	14
図 17	中世渡来銭	14

表 目 次

表 1	遺構概要表	6
表 2	遺物概要表	8

平安京左京一条二坊十二町跡

1. 調査経過

調査地は平安京左京一条二坊十二町に相当し、藤原時平邸である「本院」の推定地となっている。当町での調査は過去に試掘調査が行われている程度で、邸宅の実態はまったく不明であった。今回、初めて発掘調査が行われることとなり、「本院」に関わる遺構の有無を確認することを主目的として調査を行った。

調査区は京都市埋蔵文化財調査センターが行った試掘調査の成果に基づき、遺構の遺存状況が良好であった敷地の西端部に東西19.5m、南北7mのトレンチを設定し、平成16年2月25日より重機掘削を開始した。試掘結果では調査区中央に湿地状堆積を確認していたが、これらの遺構は平安時代後期と室町時代の井戸であることが判明したため、遺構面として上層の中世面と下層の平安時代面の2面を認識し調査を進めた。中世面では井戸とともに根石を伴う柱穴群を良好に検出し、柱穴群の記録をとった後に包含層を掘り下げ、調査の主目的である平安時代遺構面の調査にはいった。平安時代面では前述の後期の井戸と中期に遡る土器廃棄土壌を検出したが、本院の施設に直接関わる遺構は確認することができなかった。なお、井戸跡は深さが約4mあり危険が伴うと判断したため、重機を搬入して周囲の基盤層を下げ、安全を確保しながら調査を行った。そして、井戸跡の調査を終了するとともに調査区を埋め戻し、平成16年3月24日にすべての作業を終了した。

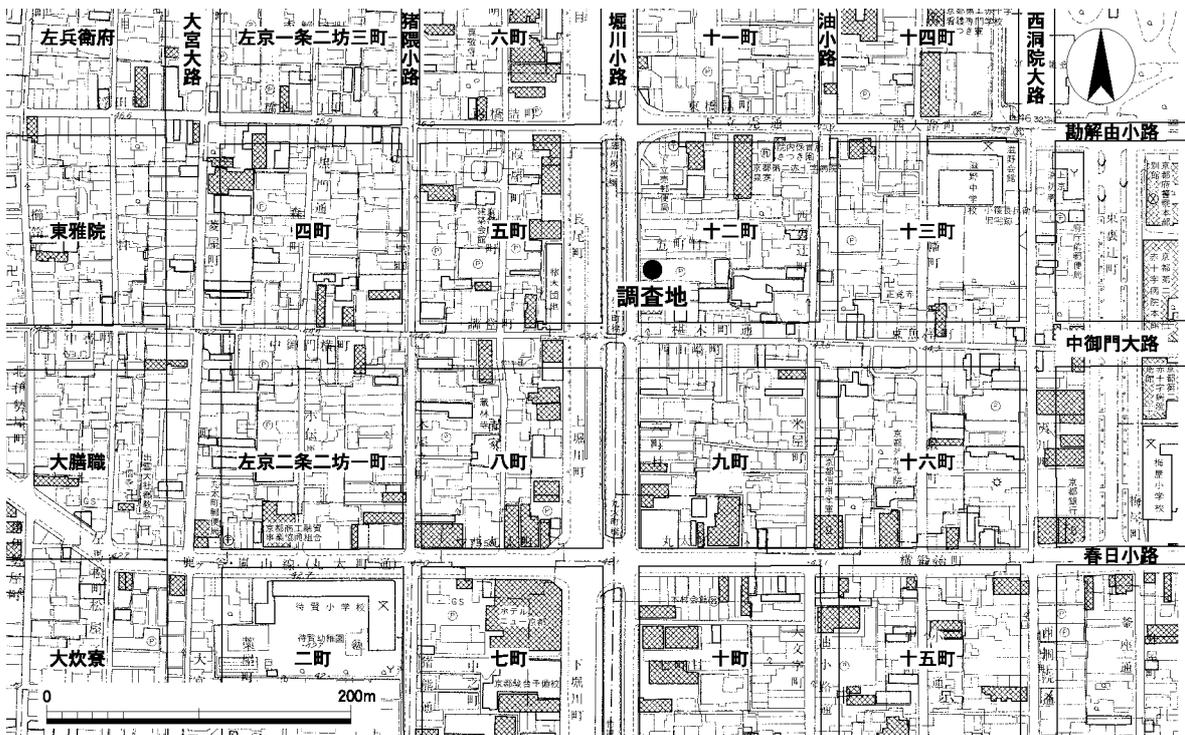


図1 調査位置図(1:5,000)

2. 位置と環境

当町は『拾芥抄』東京図によれば、藤原時平邸である「本院」の所在地として記されている。時平は関白太政大臣藤原基経の長男として生まれ、藤原氏の氏長者として若くして政権の首座に就いた人物である。菅原道真を太宰府に左遷させた首謀者として有名だが、醍醐天皇の時代には左大臣として「延喜の治」を推進させるなど、政治的手腕の優れた人物だった。「本院大臣（ほんいんのおとど）」とも呼ばれ、その邸第は「本院」と称されていた。『大鏡』には「本院」の有名な逸話として、醍醐天皇と時平が示し合わせて当時の過差（過美贅沢なこと）を戒めた話が載せられている。わざと美しい装束で参内する時平に醍醐天皇が退出を命じ、勅勘を被った時平は「本院」の門を固く閉ざして御簾の外にも出なかったというものである。当地は平安京では中御門大路の北、堀川小路の東一町を占めており、南には中御門大路を挟んで高陽院が造営された京内でも一等地にあたる。このような立地的環境にある「本院」は、平安時代中期を代表する邸第だったと考えられる。

なお、時平は延喜9年（909）に39才の若さで亡くなり、摂関家は弟忠平流に継承されていった。時平の子孫は繁栄せず、「本院」の伝領も明らかでない。『中右記』によると、平安時代後期には当町の北西隅に白河法皇寵臣である相模守藤原盛重の邸宅が所在したとされている。つまり、12世紀初めには「本院」が衰退し、一般の貴族邸宅として分割されていたことになる。「本院」の盛衰については不明な点が非常に多いといえる。

さらに、考古学的にも「本院」の実態についてはまったく不明であるが、昭和62年度に当調査地の東約70mの地点で試掘調査を1度だけ行っている。試掘トレンチは2箇所設定して行い、そ

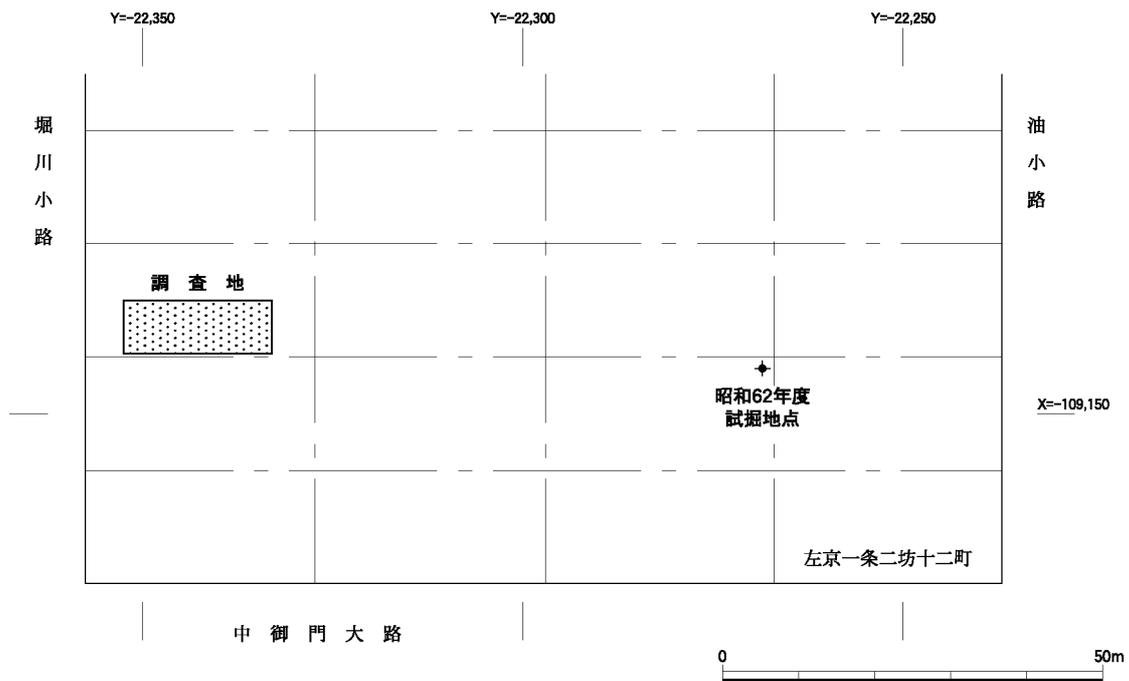


図2 平安京左京一条二坊十二町調査地配置図（1：1,000）



図3 調査前全景（東から）



図4 調査風景

のうち第2トレンチで園池の一部とみられる包含層を確認している。この第2トレンチの層序をみると、G.L.-1.5mまで盛土と近世層で、1.5m以下で平安時代の包含層を4層検出し、包含層の最下層では炭とともに多量の土器が包含していたとのことである。これらの土器群は9世紀後半のものと考えられ、「本院」の東南部に園池が所在した可能性が高いことが初めて確認された。

中御門大路を挟んで南側に所在する高陽院でも、藤原頼通が伝領する以前から園地を持つ大規模邸宅として営まれていた。高陽院はもともと桓武天皇の皇子である賀陽親王の邸第として造営されたと考えられており、『日本紀略』によると延喜5年には火災にあっている。昭和63年度の発掘調査でも、9世紀の洲浜と10世紀に整備された園池遺構を検出しており、豊富な湧水を利用して形成された園池を伴う大規模邸宅が堀川に沿って造営されていた様子を窺うことができるのである。¹⁾

註

- 1) 網 伸也「発掘調査からみた頼通伝領前の高陽院」『研究紀要』第5号 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1998年

3. 遺 構

調査区の層位は、約0.3mほどの盛り土を除去すると、天明の大火に伴う江戸時代後期の焼土層が認められ、その下層に江戸時代の整地層（拳大の礫を多く含んだ暗褐色砂泥層）が0.2～0.4mの厚さで堆積している。中世の遺構はこの江戸時代整地層の下層で検出しており、遺構面は東で標高43.0m、西で42.7mと東から西に緩やかに傾斜している。また、中世遺構面を形成する中世包含層（黒褐色砂泥層）を除去すると、無遺物の基盤層となり平安時代の遺構はこの基盤層上で検出した。なお、無遺物基盤層は東では褐色砂泥層上に堆積した黒褐色粘質土であるが、西ではこれらの下層に厚く堆積した褐色砂礫となっており、後述する平安時代後期と室町時代の井戸底部は、この褐色砂礫層とさらに下層の褐色粘土層（聚楽土）を掘り抜き、標高39m付近の明黄褐色泥砂層まで達していた。

(1) 平安時代の遺構

平安時代の遺構は、土壌3基と井戸1基である。これらの遺構のうち、土壌1～3は平安時代中期の遺構、井戸1は平安時代後期の遺構となる。

土壌1は調査区南半中央で検出した、東西約5m、南北3m以上、深さ約0.15mの不整形土壌で、埋土は炭を多く含む暗褐色砂泥である。土壌2は土壌1の東に隣接して検出した同様の不整形土壌である。南は土壌1と同じく調査区外に展開し、東は近世以降の攪乱に壊されているが、東西幅は4m以上、南北2m以上、深さは0.2mで、埋土は黒褐色砂泥である。土壌1と土壌2からは陶器写しの回転成形土器の供膳具が多量に出土し、一般的な土師器杯皿類はほとんどみられ

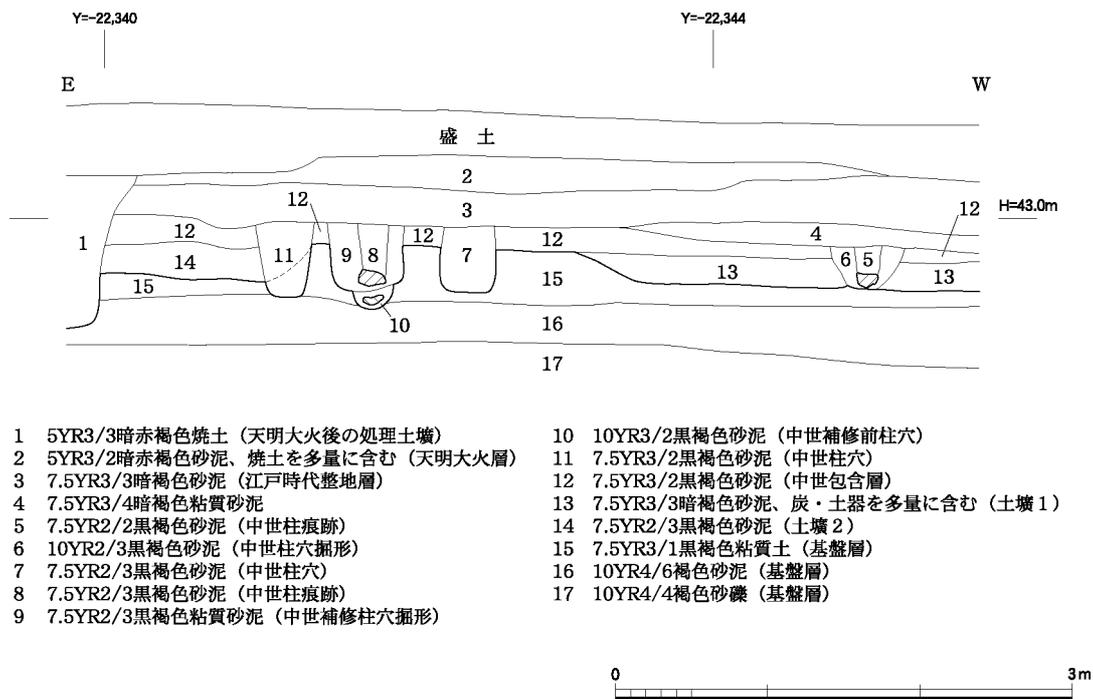
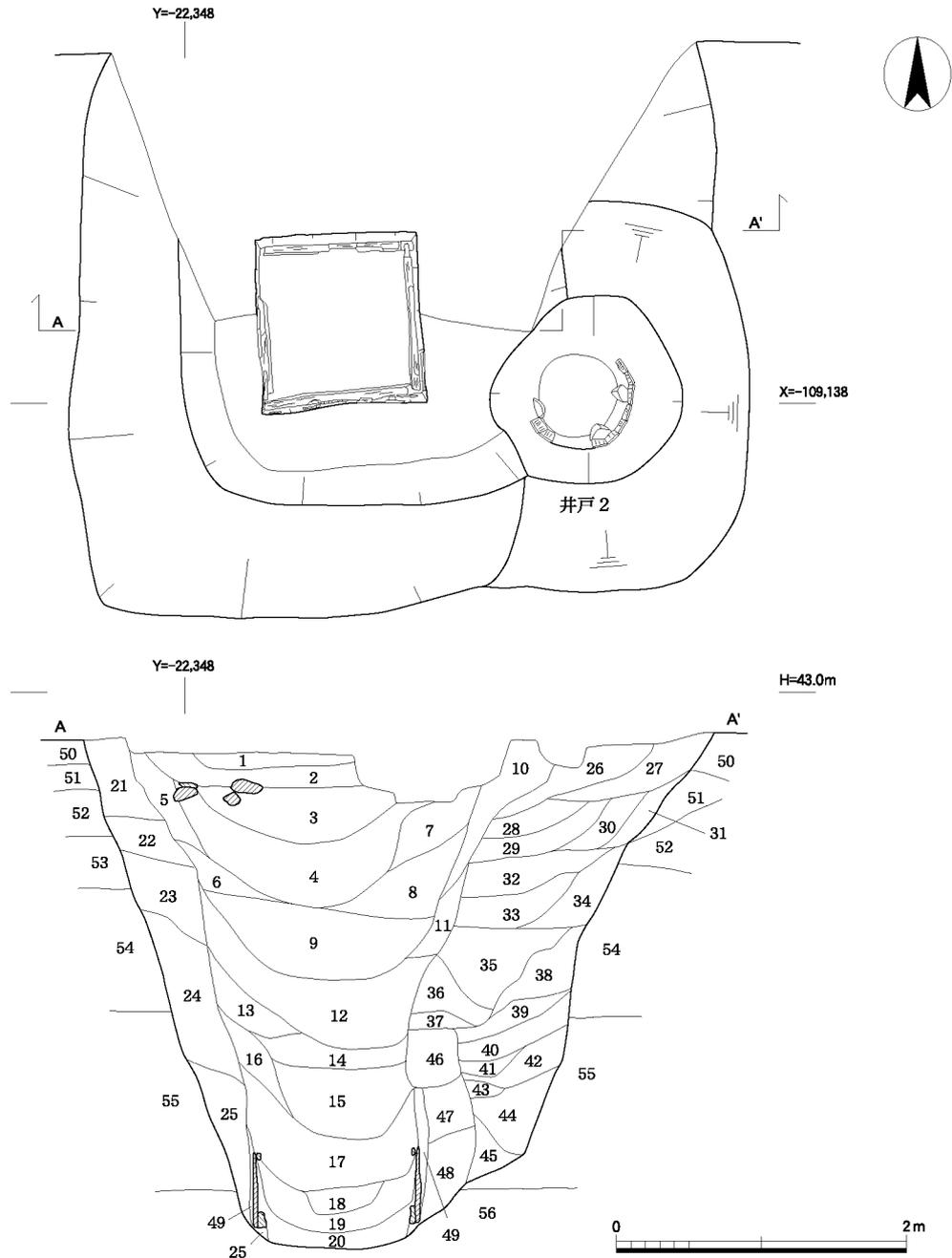


図5 南壁断面図（1：50）



- | | | |
|-----------------------------|-------------------------------|--------------------------|
| 1 10YR3/3暗褐色砂泥 (焼土・炭を含む) | 20 10YR4/2灰黄褐色泥砂 (礫を多く含む) | 39 10YR4/2灰黄褐色粘質砂泥 |
| 2 10YR2/3黒褐色砂泥 | 21 10YR3/3暗褐色砂礫 | 40 10YR3/3暗褐色粘質砂泥 |
| 3 10YR3/3暗褐色砂泥 (やや粘質) | 22 10YR4/2灰黄褐色砂礫 | 41 10YR4/3にぶい黄褐色粘土 |
| 4 10YR3/1黒褐色粘質砂泥 | 23 10YR4/3にぶい黄褐色砂礫 | 42 10YR4/2灰黄褐色粘質砂泥 |
| 5 10YR3/3暗褐色砂泥 (炭を含む) | 24 10YR3/4暗褐色砂礫 | 43 10YR4/3にぶい黄褐色粘土 |
| 6 10YR4/3にぶい黄褐色砂礫 | 25 10YR4/3にぶい黄褐色砂礫 | 44 10YR3/3暗褐色粘質砂泥 |
| 7 10YR3/2黒褐色砂泥 | 26 10YR3/2黒褐色砂泥 (褐色粘土ブロックを含む) | 45 10YR4/4褐色砂礫 |
| 8 10YR3/1黒褐色粘質砂泥 | 27 10YR3/3暗褐色粘質砂泥 | 46 10YR4/6褐色粘土 |
| 9 10YR3/4暗褐色砂泥 | 28 10YR4/6褐色粘土 | 47 10YR4/3にぶい黄褐色粘土 |
| 10 10YR4/6褐色粘土 | 29 10YR3/3暗褐色砂泥 | 48 10YR5/3にぶい黄褐色粘質砂泥 |
| 11 10YR3/3暗褐色粘質砂泥 | 30 10YR3/2黒褐色粘質砂泥 | 49 10YR3/3暗褐色粘土 |
| 12 10YR3/3暗褐色砂泥 (礫を多く含む) | 31 10YR3/3暗褐色粘質砂泥 | 50 10YR3/4暗褐色砂礫 (基盤層) |
| 13 10YR3/3暗褐色粘質砂泥 | 32 10YR3/2黒褐色砂泥 | 51 10YR4/3にぶい黄褐色砂礫 (基盤層) |
| 14 10YR3/2暗褐色粘質泥砂 (炭を含む) | 33 10YR3/3暗褐色粘質砂泥 | 52 10YR4/4褐色砂礫 (基盤層) |
| 15 10YR4/2灰黄褐色粘土 | 34 10YR2/3黒褐色粘質砂泥 | 53 10YR4/3にぶい黄褐色砂礫 (基盤層) |
| 16 10YR3/4暗褐色砂礫 | 35 10YR3/3暗褐色粘質砂泥 | 54 10YR4/6褐色砂礫 (基盤層) |
| 17 10YR3/3暗褐色粘質泥砂 | 36 10YR4/6褐色粘土 | 55 10YR4/6褐色粘土 (家業土基盤層) |
| 18 10YR4/1褐色粘土 | 37 10YR3/2黒褐色粘土 | 56 10YR6/6明黄褐色砂礫 (湧水基盤層) |
| 19 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥 (礫を多く含む) | 38 10YR4/6褐色粘土 | |

図6 井戸1実測図(1:50)

表1 遺構概要表

時代	遺構	備考
平安時代中期	土壌1～3	回転成型土器が多量に出土。白磁土出土。
平安時代後期	井戸1	深さ約3.5mの方形横棧縦板組井戸。
室町時代	井戸2	円形縦板組井戸。
	建物1	建物1は小礎石をもつ。建物北側柱部を検出。
	柵1	宅地の北を限る東西柵。

ないという特殊な状況が窺える。土壌3は調査区北東部で検出した東西約3m、南北2m以上、深さ0.1～0.15mの不整形土壌である。埋土は炭を多く含む暗灰黄砂泥で、やはり土器を多く含むが、土壌1・2と異なり回転成型土器群は目立たない。これらの土壌群は出土土器の観察から、9世紀後半から10世紀初頭の時期が与えられる。

井戸1は一辺約4.5mの方形掘形をもつ大型井戸で、検出面で一辺約2.5mの井戸枠痕跡が認められた。深さは約3.5mで、底部標高は39.15mである。湧水層は基盤の褐色粘土層（聚楽土）の下層である明黄褐色砂礫層で、この砂礫層と褐色粘土層の変換点の標高は39.55mであった。底部に建築部材を再利用した一辺1.1mの方形横棧が組み立てられており、各辺は5枚の縦板で構成されていたようだが、遺存状況が悪く縦板は0.4mほどしか残っていなかった。掘形埋土を観察すると東半

には褐色粘土が多く混入しているのに対し、西半では砂礫のみで対象的であった。これは掘形掘削時に上層の砂礫は西に積み上げたのに対し、下層の褐色粘土は東に積み上げて、井戸枠形成後にこれらの廃土を東西から掘形土として埋めていったためと考えられる。井戸掘削の時期であるが、枠内とともに掘形からも11世紀の土器類が出土しているため、時期は平安時代後期まで下がると思われる。

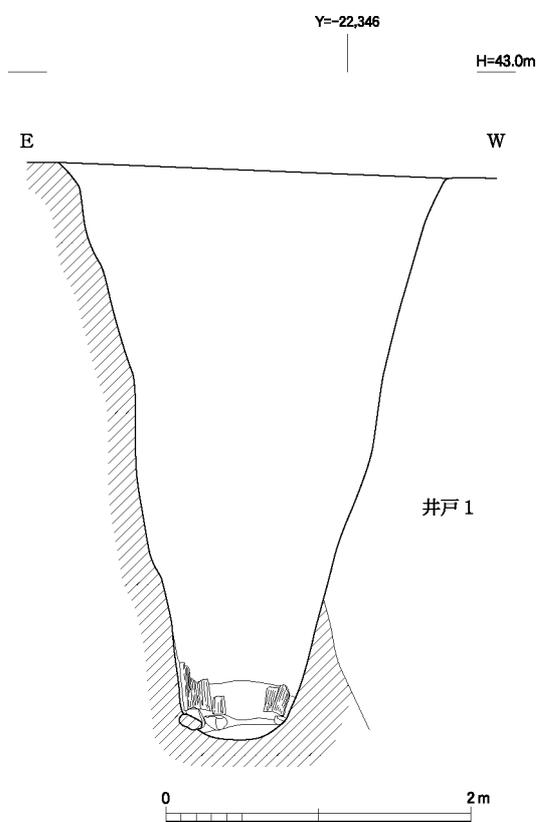


図7 井戸2見通し断面図(1:50)

(2) 室町時代の遺構

中世の遺構は、井戸1基とともに現状で建物1棟と柵1列を抽出した。

井戸2は井戸1の南東部を壊して穿たれた円形井戸で、中世遺構面から底部まで深さが約3.8m、底部標高が38.6mである。井戸1と同じ明黄褐色砂礫層を湧水層としている。検出面での掘形直径は約2.5m、枠内直径は約1.2mで、底部には推定

直径約0.7mの円形縦板組井戸枠が残っていた。埋土は上層が暗褐色粘質砂泥で下層は礫を多く含む黒褐色粘土であった。井戸の位置は、堀川小路東築地心から約12mである。

建物1は井戸2の南、南壁沿いに検出した重複した東西柱穴群で、遺構の配置から建物の北側柱と認識した。東西の長さは約8.5mで、東に延長する可能性もある。建物と解釈した根拠としては、同一位置で数回の建替えが認められることや、柱根石としてやや大振りの小礎石を柱穴底部に据えており、同一柱穴でも根腐れした柱と礎石の間にさらに礎石をいれて補修した痕跡が認められることなどである。井戸2の南に接して2間分の柱列があり、建物の北側に張り出し部を持つ構造であった可能性もある。西端柱穴は堀川小路東築地心から約8.3mの位置にあり、現状では小路に面して建てられた建物とは想定できない。



図8 中世柱穴礎石断面

柵1は調査区北壁沿いで検出した東西柱列である。柱間は不揃いで柱根石もほとんど持たない。柱直径もやや小型で浅く、建物1の柱穴とは明らかに異なっているため、家地の北を限る柵列と想定した。この想定が正しければ、建物1の北側に接して井戸2が穿たれており、その北側を東西柵1によって限る宅地復元が可能となる。

4. 遺物

今回の調査で出土した遺物は、整理箱にして24箱である。上層遺構面からは室町時代前期以降の遺物が出土し、下層遺構面からは平安時代中期と後期の遺物が出土している。ここでは、平安時代中期の遺物・平安時代後期の遺物・室町時代の遺物に分けて概要を述べる。

(1) 平安時代中期の遺物

平安時代中期の遺物は、土壌1～3から出土した一括資料の土器群が重要である。体部外面が押さえ成形未調整で口縁は外反ぎみに屈曲し、端部を内側に肥厚させる一般的な土師器杯皿類は、土壌1・2では非常に少なく口縁破片で合わせて15点しか確認できない(1～3)。これに対し、意図的に浅黄橙色からにぶい橙色に焼き上げた、陶器写しの回転成形土器の椀皿類が多量に出土している(7～10・14～18)。これらの土器群は焼き上がりの色調は異なるが、製作技法を観察すれば白色土器と共通点が多く、特殊な土器群といえる。口径15cm前後のもの(7～10)と口径約19cmの大型椀(14・15)に分かれ、前者の資料(7・8)の底部外面には回転系切り痕跡を明瞭に残す。口縁部から底部まで残る資料は少ないが土壌1・2から出土した底部資料を観察すると、底部外面を削り出し成形で輪高台あるいは平高台(17・18)とするものが12点なのに対し、回転系切り未調整のもの(7・8・16)が252点と圧倒的に後者が多い。逆に土壌3から出土した資料は土壌1・2とは様相が異なり、回転成形土器の出土はあまり目立たず同時期に一般的な土師器杯皿類(4～6)が多い。しかも、蓋(11)や椀(12・13)など胎土・色調から明らかに幡枝窯産の白色土器と判断できる資料が出土する。これら土器組成の違いから、土壌1と土壌2は一連の遺構と考えられるが、土壌3は性格が少し異なる可能性が高いといえる。

また、土壌1・2からは黒色土器・緑釉陶器・須恵器・在地産白色土器・輸入白磁が出土している。黒色土器は土壌2から杯B(19)、土壌1からは甕(20)のほか、内外面を丁寧に磨いて全

表2 遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
平安時代中期	土師器・回転成形土器・須恵器・黒色土器・白色土器・緑釉陶器・輸入白磁・飾金具	4箱	土師器6点、回転成形土器9点、黒色土器3点、白色土器4点、緑釉陶器3点、須恵器2点、輸入白磁1点、飾金具1点	少量	2箱
平安時代後期	土師器・須恵器・白色土器・灰釉陶器・緑釉陶器・瓦器・輸入白磁・石硯・瓦	10箱	土師器21点、須恵器1点、白色土器2点、灰釉陶器2点、緑釉陶器1点、瓦器2点、輸入白磁12点、石硯1点、軒瓦2点、熨斗瓦4点	少量	7箱
室町時代	土師器・白色系土器・瓦器・山茶椀・須恵器・焼締陶器・輸入陶磁器・砥石・渡来銭・瓦	10箱	土師器17点、白色系土器19点、瓦器3点、山茶椀1点、輸入陶磁器2点、渡来銭6点、軒瓦2点	少量	7箱
合計		24箱	127点(7箱)	1箱	16箱

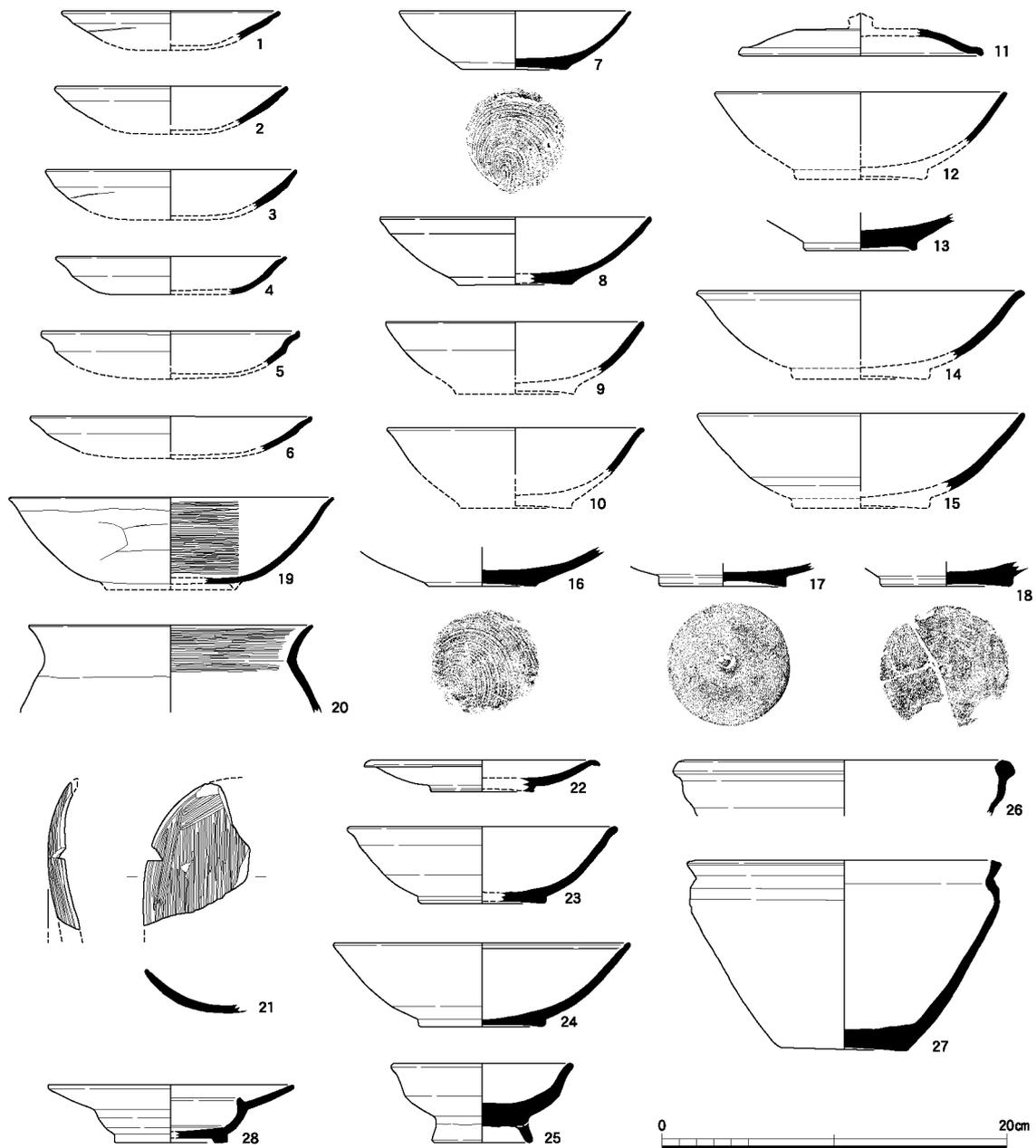


図9 土壌1～3出土土器実測図(1:4)

面黒色化させた風字硯破片(21)が出土している。緑釉陶器は硬陶系の平高台皿(22)と軟陶系の平高台椀(23・24)が土壌1から出土しており、皿の内面には擦痕が認められる。須恵器は肩から口縁部が屈曲して端部を平坦に成形する篠窯産の鉢(27)が出土しているが、口縁部が玉縁状に成形した新しい様相をもつ鉢破片(26)も認められる。さらに、高く踏ん張った貼り付け輪高台をもつ白色土器小椀(25)が土壌1から出土した。底部外面には回転系切りの痕跡が若干残り、内面は黒く炭化している。幡枝窯産の白色土器とは製作技法や形態が異なっており、在地産の白色土器と考えられる。輸入白磁は土壌2から平安京ではあまり類例をみない托(28)が出土しており、土壌1からは小破片ながら椀や壺体部の破片も出土している。これらの土器群の絶対年代であるが、土師器杯皿類の型式は平安京編年の 期中段階から新段階に相当し、西暦900年前

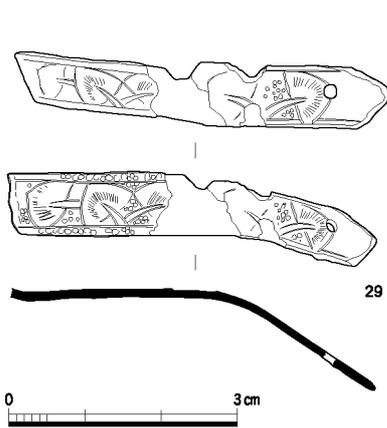


図10 土壌1出土飾金具実測図(1:1)

後の年代が与えられる¹⁾。

この他、土壌1から青銅製鍍金飾金具(29)が出土している。中心で折れ曲がっているが、残存長5.1cm、幅0.8cmの細長い板状の飾金具で、上下縁を斜めにカットした端部から約0.7cmの位置に穿孔を加える。反対側の端部は欠損する。表面は魚子地に毛彫によって花文あるいは葉文を表現し、鍍金して仕上げる。同様の飾金具は淳和院の築地内排水施設と右京三条一坊六町の園池から出土しており²⁾、土器組成の特殊性と合わせて当地域が高級貴族邸宅の一画であることを示唆している。

(2) 平安時代後期の遺物

平安時代後期の遺物は井戸1から多量の土器類が出土している。大半が土師器皿であるが、輸入白磁の出土も目立つ。土師器皿は口径10cm前後の小皿と、口径15cm前後の大皿、そしていわゆる「コースター」形皿に大別できる。小皿はさらに口縁部が緩やかに外反して端部を丸くおさめるもの(30・31)と、口縁具が強く屈曲して外反し端部を上方に肥厚させるもの(32~39)に分かれる。大皿は体部外面はオサエ成形で口縁部を2段にナデて仕上げたものである(40~47)。「コースター」形皿は底部が平坦で口縁部を内側に折り曲げたもので(48・49)、口径は13.5cm前後である。また、特殊な器形として小型の器台脚部らしきもの(50)がある。これらの土師器は平安京編年の期中段階に比定できるもので、11世紀中頃の年代が与えられる。

土師器に対し、その他の器種は非常に少ない。白色土器は皿(51)と椀(52)が出土している。底部は皿が回転ヘラ切り未調整、椀が回転系切り未調整である。緑釉陶器は近江産緑釉陶器椀の底部(53)が認められるが、とくに出土数が少ないといえる。灰釉陶器は椀破片(54)が数点出土しており、輪花椀(55)も見られる。輪花は口縁外側から篋状工具で花卉の刻みを軽く入れている。高台はやや外側に踏ん張った断面三角形の貼り付け高台で、底部外面に回転系切り痕跡が若干残る。内面は擦痕が明瞭に確認できる。百代寺窯式に比定できる資料である。また、体部外面に磨きを施し、断面逆台形のしっかりした高台をもつ古式の瓦器椀(56・57)も少量出土しており、供伴する土師器の平安京編年での位置づけと矛盾はないであろう。なお、丸い体部から口縁部が緩やかに立ち上がる須恵器壺(58)が出土している。体部外面は叩き締め円弧を描く平行叩きの後にナデ調整を施し、内面にも平行叩きの痕跡が残る。器形や技法の観察から、瀬戸内地域からの搬入品と考えられる資料である。

輸入白磁は皿と椀が一定量まとまって出土している。白磁皿は口径約10cmで端部が外方へ屈曲し、底部は回転ヘラ削りによるやや挟れた平底を呈するもの(59)と、口径12.5cmほどで体部から口縁部は屈曲して直線的に口縁が立ち上がり、底部は削り込みによって僅かな輪高台を呈するもの(60・61)がある。また、有段の輪花皿(66)や椀の高台と特徴が一致する皿底部(69)も

みられる。椀は口径12.7cmのやや小型の椀で、口縁部がやや外反して端部を丸くおさめるもの（63）と、口径17cmほどの玉縁口縁をもつもの（63・65・67・68）がある。資料（63）は小さな玉縁をもち、偏平な玉縁をもつ資料（67）とともに白磁椀2類に分類されるものである。資料

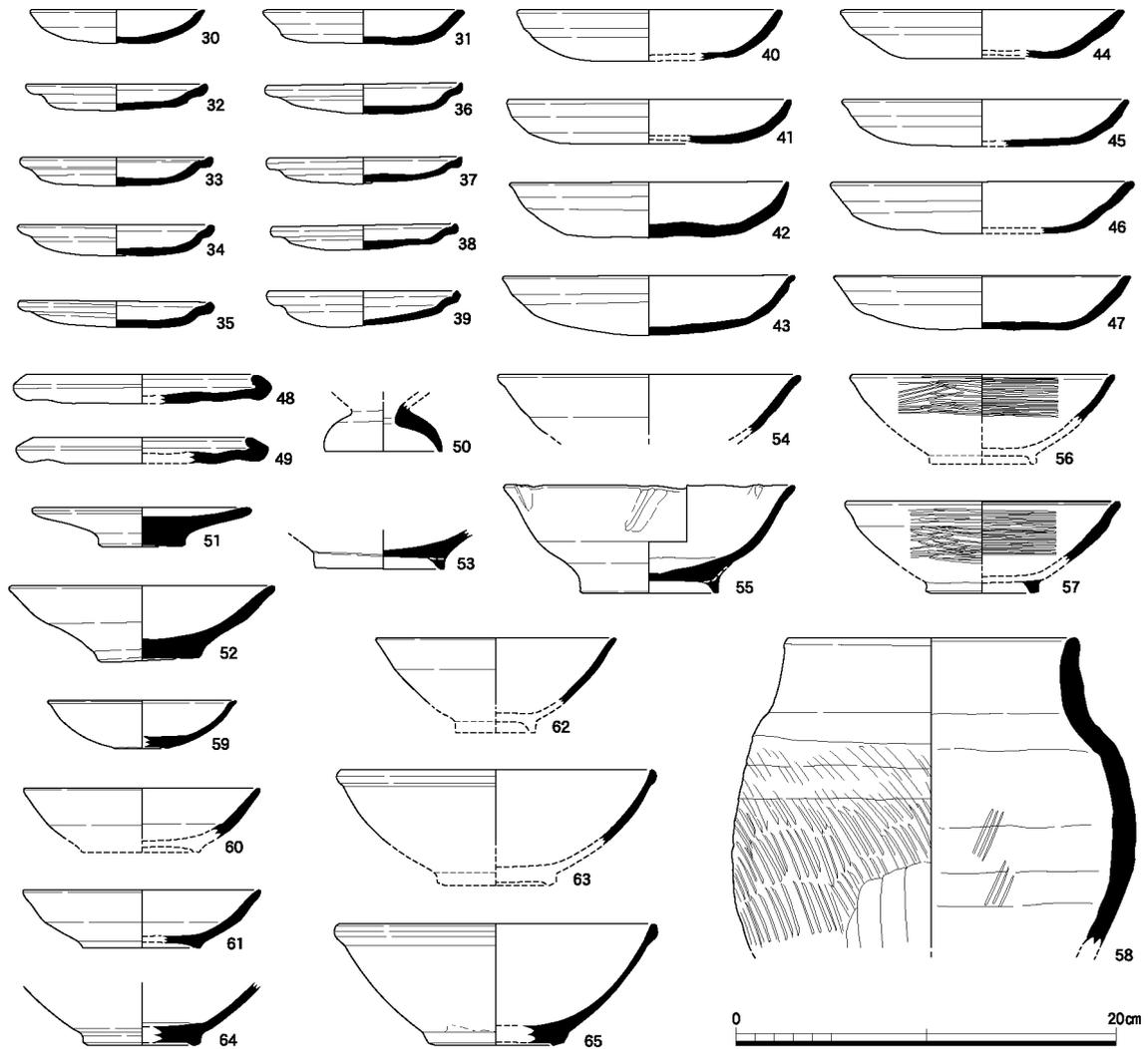


図11 井戸1出土土器実測図（1：4）

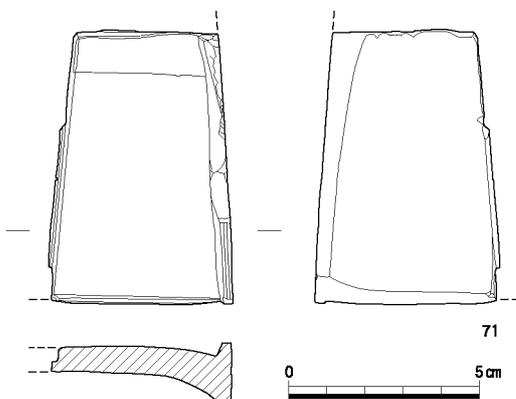


図12 井戸1出土石硯実測図（1：4）



図13 井戸1出土石硯

(65・68)は玉縁が肉厚な白磁椀4類で、資料(65)の底部は削り出しの低い輪高台をもつ。削り出し高台をもつ椀底部(64)も白磁椀4類であろう。資料(70)は白磁壺の底部である。これらの白磁は、セットとして11世紀後半から12世紀前半の標準資料となっている一群である。

この他、井戸1から石製風字硯(71)が出土している。材質は黒色で、均質・緻密な頁岩～粘板岩の堆積岩である。陸部から海部にかけての資料で、陸部右側方と海部後方を約3分の1から4分の1ほど意図的に切断している。側端には幅約0.3cmの縁が立ち上がり、陸先端部と縁上面に繊美な2条の沈線が施されている。陸部端面はやや鋭角に成形され、側面とともに平坦に美しく研がれている。裏面は滑らかな曲面状に削りを施し、脚の接地面をつくる。同様の風字硯は鞍馬寺経塚から出土しているが、比較すると側端面の調整や沈線による装飾、裏面の抉りなど本資料のほうが優美に仕上げられている。切断の目印として表裏面に沈線³⁾を施すが、縦方向は沈線に沿って切断しているが、横方向は沈線と切断面が合致しない。当資料は砥石として再利用されたようで、最終的な形状は、縦7.2cm、上辺3.8cm、下辺4.8cmの台形状石製品となっている。

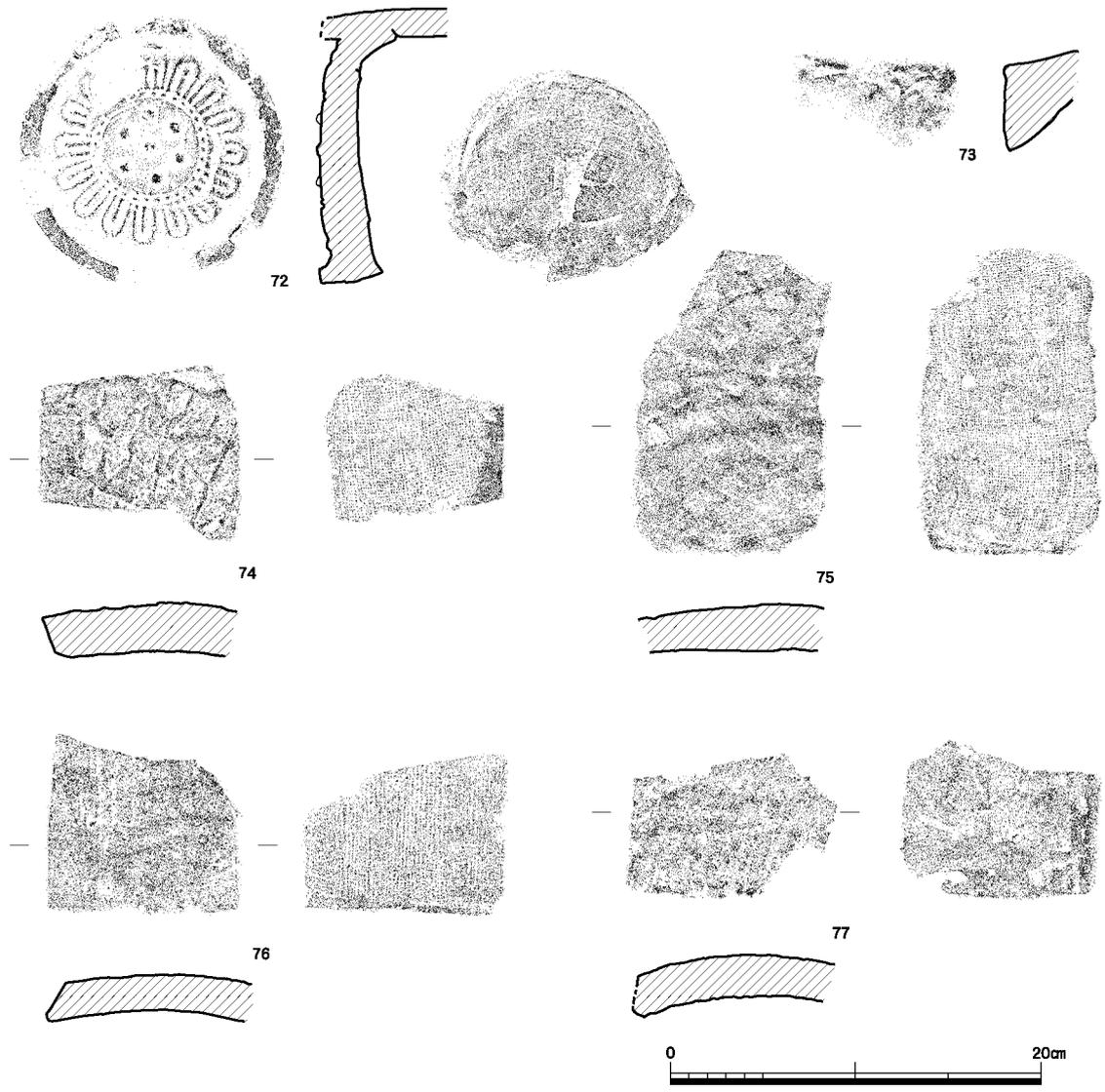


図14 井戸1出土瓦類拓影・実測図(1:4)

瓦類は井戸1から若干出土するだけで、出土量は少ない。軒丸瓦(72)は単弁十六弁蓮華文軒丸瓦で、大振りの中房に1+6の蓮子を配し、中房の周りには蕊を表す細かい珠文が巡る。瓦当裏面から丸瓦部凹面に連続する細かい布目が残し、瓦当裏面下端はケズリ調整によって仕上げる。瓦当部から丸瓦部に粘土を重ねていった痕跡が、粘土の継ぎ目の凹線となって丸瓦部凹面に残る。焼成は良好で暗灰色の須恵質に焼き上がっており、産地は不明だが在地で生産されて平安京に搬入された軒瓦と考えられる。軒平瓦(73)は京都近郊窯産の唐草文軒平瓦である。焼成は燻しがかかっており、外面は暗灰色、内部は灰白色に焼き上がる。胎土は小石を多く含み、1cm大の石も含んでいる。丸瓦と平瓦はそれぞれ20点と58点出土しているが、小破片ばかりである。平瓦を観察すると、凸面叩きは大振りな斜格子叩き(74・75)と縦縄叩き(76・77)が認められ、後者の出土数のほうが多い。側面と平行した破面をもつものが目立ち、最大幅で10cmから11cmとなっていることから、おそらく葺棟に使用された瓦群と考えられる。

(3) 室町時代の遺物

中世の土器類は、上層遺構面を形成する包含層と井戸2から多く出土した。とくに、調査区北

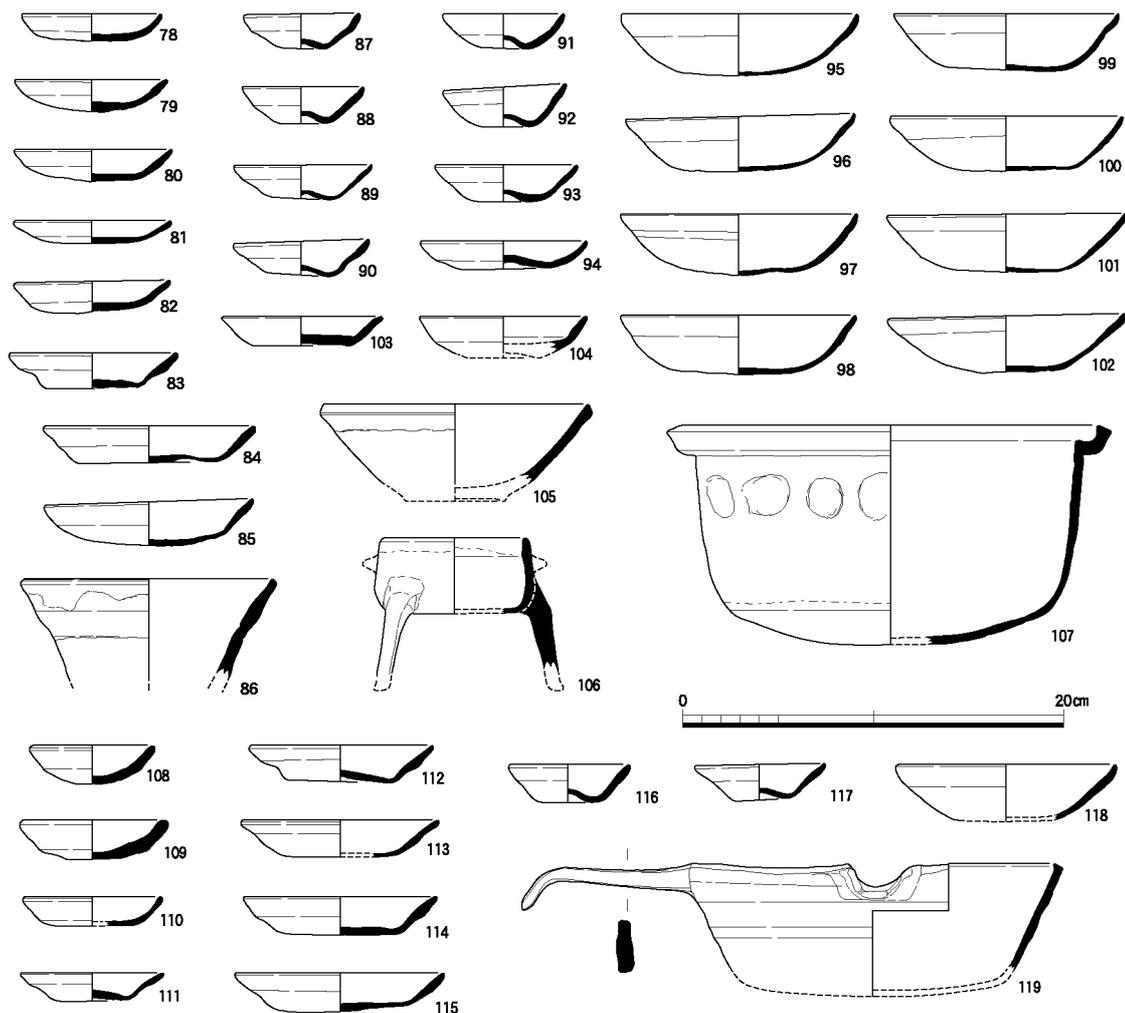


図15 中世包含層・建物1柱穴・井戸2出土土器実測図(1:4)

東部から土器が集中して出土したが、土壌などの明確な遺構として認識できなかったため包含層出土資料として一括して報告する。

調査区北東部の包含層から出土した土師器は、口径8cm前後の小皿(78~83)と、口径11cm強の皿(84・85)に分けられ、白色系土器は口径7cm前後のへそ皿(87~93)とともに、底部の窪みがまだ発達しない口径8.8cmの小皿(94)が出土した。白色系土器の大皿は12~12.5cmほどのものが中心で、包含層内で折り重なるように出土した。また、口縁部がラッパ状に開く手付くね土器(86)や山茶椀系土器(105)、瓦質土器の鍋(107)、龍泉窯系青磁皿(104)などが出土しており、調査区南の包含層からは三足の小型羽釜(106)も出土した。これらの土器群は平安京編年の 期中段階から新段階に相当し、14世紀前半の年代が与えられる。

遺構に伴う良好な遺物としては、建物1柱穴から出土した白磁皿(103)のほかは井戸2から出土した土器群があげられる。土師器小皿は底部に丸みを帯びた厚手のもの(108・109)と、口径

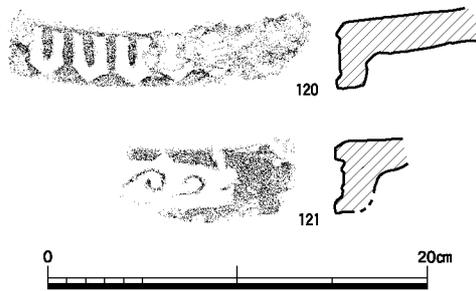


図16 中世遺構出土軒瓦拓影・実測図(1:4)

7.5cmほどで平坦な底部をもつ一般的形態のもの(110・111)がある。土師器大皿は口径10~11cmほどのものが中心となる。白色系土器はへそ皿(116・117)とともに口径11.6cmの大皿が出土しており、瓦質土器では把手付片口鍋(119)が認められる。これらの土器群は平安京編年の 期古段階から中段階に相当し、14世紀後半から15世紀初頭の年代が与えられる。

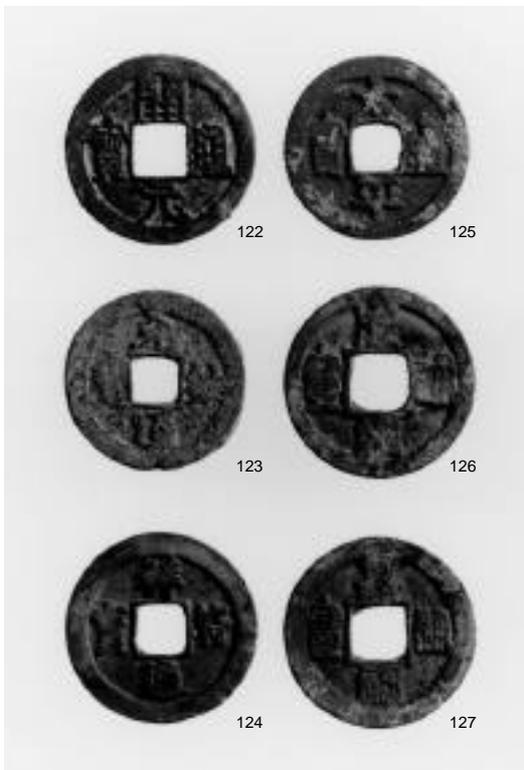


図17 中世渡来銭

瓦類はほとんど出土していないが、建物1柱穴から剣頭文軒平瓦(120)が、井戸2上層から唐草文軒平瓦(121)が出土している。剣頭文軒平瓦は折り曲げ式で、凹面布目部にヘラ記号が認められる。胎土は砂を多く含み、若干燻しがかかる。京都栗栖野窯産と考えられ、12世紀に生産された型式であるが、同時期の遺物は他には出土していない。唐草文軒平瓦は、薄手の平瓦端部凸面を斜めに削り込んで顎を接合し文様部を成形しており、唐草の意匠も室町時代の様式を備えている。端部を切り詰めた瓦当範を使用したらしく、最終単位の唐草が切れている。

この他、渡来銭が数枚出土している。中世包含層からは「開元通寶」(122)・「元祐通寶」(123)が、井戸2下層から「祥符通寶」(124)が、近世井戸から「大平通寶」(125)・「皇宋通寶」(126)・「嘉祐通寶」(127)が出土した。

註

- 1) 平安京編年については以下の論文を参照としている。
小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要』第3号 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1996年
- 2) 吉川義彦『淳和院跡発掘調査報告 平安京右京四条二坊』関西文化財調査会 1997年
本 弥八郎・平尾政幸・山口 真『平安京右京三条一坊三・六・七町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報2002-5 (財)京都市埋蔵文化財研究所 2002年
- 3) 田澤金吾『鞍馬寺経塚遺寶』鞍馬寺 1933年
『國寶鞍馬寺経塚遺物修理報告書』鞍馬寺 1966年
なお、鞍馬寺経塚出土の石硯との比較検討を行うにあたっては、京都国立博物館の宮川禎一氏のご協力を得て、有益なご教示をいただいた。

5.まとめ

今回の発掘調査は、左大臣藤原時平邸である「本院」の初めての発掘調査であり、平安時代中期の特殊な土器を多量に包含する落ち込みを検出した。これらの土器群は昭和62年度の試掘調査で検出した園池遺構と同時期であり、「本院」の遺構が良好に遺存していることが判明したといえる。とくに、土器廃棄である土壌1・2の一括資料は、遺物の概要でも述べたように非常に特殊な土器組成をもっており、当地域が一般的京内宅地とは異なる邸宅であったことを十分推測できる。ここから出土した陶器写しの回転成形土器類は、同様の資料が累代の後院である冷然院の調査でもまとまって出土しており、高級貴族邸宅で使用された土器群として再認識するとともに、「本院」での生活を窺わせる貴重な資料といえよう。

また、11世紀の大型井戸は本院の盛衰を考えるうえでの重要な遺構である。前述したように平安時代後期には、「本院」が衰退し一般貴族邸として分割されていたことが文献史料から推測されている。今回検出した井戸1から出土した土器群は、ごく一般的な土器組成であり高級貴族邸宅での使用を示すものではない。おそらく「本院」に直接関わるものでなく、平安時代後期に分割された貴族邸宅の井戸と考えられ、考古学的な見地からも「本院」の分割を裏付けている。

最後に中世の様相であるが、室町時代の円形井戸とともに、小礎石を伴う建物の一部と宅地の北側を区切る東西柵を検出した。堀川は材木を京都に運ぶための重要な水運であり、祇園社に所属する堀川材木神人が材木座を形成していた。江戸時代の文献だが、『京羽二重』でも東堀川通り二条北で材木類の商・職人をあげており、下京だけでなく上京への物資搬入のための水運として機能したと考えられる。天正5年(1587)には太閤秀吉が聚楽第を造営するが、その位置は堀川の西方、一条と丸太町の間と想定されている。聚楽第の建築に際しては大量の建築物資が堀川を遡ったと想定できよう。堀川が時代を通じて重要な機能を果たすとともに、中世以降においても調査地周辺で活発に人々が生活していたことを示唆している。

「本院」地域の考古学的調査はまだ始まったばかりであり、不明な点が多く残されている。今後は狭い面積の調査でも継続して行うことによって、「本院」の盛衰の実態を明らかにするとともに、中世上京における堀川の様相も解明していく必要があるだろう。

圖 版

報 告 書 抄 録

ふりがな	へいあんきょうさきょういちじょうにぼうじゅうにちょうあと							
書名	平安京左京一条二坊十二町跡							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報							
シリーズ番号	2003-18							
編著者名	網 伸也							
編集機関	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2004年5月28日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
へいあんきょうあと 平安京跡	きょうとうしつかみぎょうく 京都市上京区 ひがしほりかわどおりさわらぎ 東堀川通榎木 ちようあがるごちようめ 町上る五町目 205-1他	26100		35度 00分 57秒	135度 45分 19秒	2004年2月 25日～2004 年3月24日	136.5㎡	寄宿舍 建設工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
平安京跡	都城跡	平安時代中期	土壇 1～3	土師器・回転成形土器・須恵器・黒色土器・白色土器・緑釉陶器・輸入白磁・飾金具		回転成形土器が多数出土し、白磁托や飾金具が出土。本院の時期の遺物として重要。		
		平安時代後期	井戸 1	土師器・須恵器・白色土器・灰釉陶器・緑釉陶器・瓦器・輸入白磁・石硯・瓦		大型の方形縦板横棧組井戸を検出。本院衰退後の宅地で使用された井戸。白磁が目立って出土。		
		室町時代	建物 1・柵 1・井戸 2	土師器・白色系土器・瓦器・山茶碗・須恵器・焼締陶器・輸入陶磁器・砥石・渡来銭・瓦		堀川に面した宅地の建物の一部と井戸および北限の柵を検出。包含層からは多くの土器が出土。		

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2003-18

平安京左京一条二坊十二町跡

発行日 2004年5月28日

編集
発行 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1
〒602-8435 075-415-0521
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町298番地
〒604-0093 075-256-0961